

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

母への思い

鳥越中学校一年

上野うえの

隼綾音はあと

僕の母は、いつも口うるさく怒る。でも、優しい。これは、僕が長男として、長子としてしっかりやってほしいからこそ、怒ったりほめたりしてくれているのだと思う。

六年生のとき、最後の大会で母は、バックネットでアナウンスをしていた。応援席にはおらず、僕の応援ができなかった。でもきつと、心の中で応援してくれたと思う。そのおかげで、ヒットを打つことができた。試合だけではなく、早朝から、送り迎えをしてくれたり、昼ご飯を作ってくれたりした。野球だけではなく、学校でも授業参観や親子活動などの行事にも来てくれた。

目の前でなかなか「ありがとう」という五文字は言えないので、せめて家の中で何かして感謝の気持ちを伝えようとするけれど、不器用な僕は何もできず、今でもたたくさんの世話を焼かしている。今ではもう僕も中学生でいつまでもあまえてばかりではだめだと思っけていても、まだ何もできない。やっけてもらってばかりの僕の世話をしてくれる母にはとても感謝している。いつかこの感謝の気持ちを伝えたい。

小学校を卒業して、自転車か徒歩で登校しなければいけなくなったとき、母は、

「自転車は転んだりけがしたりして危ないから歩いていったら？」と心配してくれた。正直、そのときはバッグも重いし、学校まで遠いから大変だと思っけていたけれど、心配してくれているからこそ出てくる言葉なのだと思っくと、とてもうれしく思っけた。

登校するときはいつも、

「気をつけてや。」

とか、部活に行くときは、

「野球がんばれ！」

など、必ず一言かけてから見送っけてくれる。僕はただ、

「うん。」

と返事をするだけで行っけてしまっう。母も八時二十分までに出勤しなければいけなくて、いそがしいはずなのに、いつも一言かけて見送っけてく

れる。そのことに、「ありがとう」と言っけたことがないので、少し照れくさいが、今度勇気を出して言っきたいと思っう。

母は朝から夕方まで働き、妹の習い事があるときは妹を送っけて、車の中で妹を待ち、習い事が終わるとそのまま夜ご飯をすませて家に帰り、帰っけてきたら家事をして、と休まず働っけている。僕も洗たくをするなど手伝いをしていけるけれど、それでもやることはたくさんあり、それを母がすべてやっけている。仕事の疲れを一切見せず、家事をやっけている母を尊敬するし、何より感謝の気持ちでいっぱいだ。これからは、母にずっくと助けられてばかりではなく、少しずつでも母を助ける立場になっけていけるようがんばっけていきたい。

僕には入学したい高校がある。その高校に入り、野球部に入部して甲子園に母を連れて行き、僕が活やくしているところを見せるのが、僕の最大の夢だ。母も、

「甲子園、いつか連れてっけて。」

と笑いながら言っうので、その期待を裏切らないように、これまで支えてもらっけた恩を胸に今から努力して、三年後、甲子園の土をふめるようがんばりたい。

小さいころから、僕はやりたいことをたくさんやっけてきて、失敗もたくさんした。でも、母は僕のやっていることを否定せず、静かに見守っけてくれた。足を骨折したときは、仕事を休んで病院に連れていっけてくれた。

苦しいことやいやなことを味わっけたとき、その苦しいことやいやなこととの壁を乗り越えて、今の自分があると思っうが、その背後には、母の支えがあったからこそ乗りこえられたのだと思っう。母は僕の宝物だ。母がいなければ、乗りこえられなかつた壁もたくさんあった。たまに、母に對して「うるさいな」と思っけてしまっうこともある。しかし、母の存在があっただけから今の自分がある。そう思っけてこれからも、世話をかけると思っうが、母を少しでも助けられるようがんばりたい。

母は、僕の自慢の母親だ。